

2020 年 7 月 20 日

担当者: 小松

連見 石会  
森長 杉会

## 原油、当面40ドル台で推移

### 燃料油需要は回復傾向



石油連盟の杉森務会長（ENEOSホールディングス会長）は17日に定

例会見を実施し、新型コロナウイルス影響下の需要動向や原油価格の展望について語った。7月のガソリン需要は「前年比で」96%程度まで戻ってきたようだ」と述べ、国内の燃料油需要は回復傾向にあるとの認識を示した。原油価格（ドバイ）の展望については「今後1カ月は40ドル台で推移する」との予想を述べた。

直近の原油市況に関して「ドバイ原油は40ドル台前半の比較的狭い範囲で推移した。石油輸出国機構（OPEC）とその他の主要な産油国で構成されるOPECプラスが協調減産を延長する姿勢を強めた一方、欧米や中国

で景気の回復基調を示す指標が発表され、原油市況の改善に対する期待が高まった」と振り返った。今後の原油価格については「新型コロナウイルスの感染拡大が経済活動に与える影響をみていきたい」と語った。

国内のガソリン需要は回復傾向にある一方で、新型コロナウイルスにもなう需要減は7月も「2%ほど残っている」と述べた。今後については「（需要が）戻るのか、戻らないのか。もう少しみないと分からない」と語り、動向を注視する姿勢を示した。製油所の稼働率については「7月は8割程度だ。とくに需要に大きな変動がない限り、ほぼ今の状態でいくだろう」と述べた。

一方、ハイオクガソリンの性能表示問題に関しては「一部で消費者の誤解を招く恐れのある表記があった。消費者にご迷惑をおかけすることがあり、大変残念に思う。すでに適切な表現に修正されている」と語った。

2020 年 7 月 20 日

担当者: 榎野

## 米掘削装置稼働低迷

### シエール油価回復も慎重姿勢

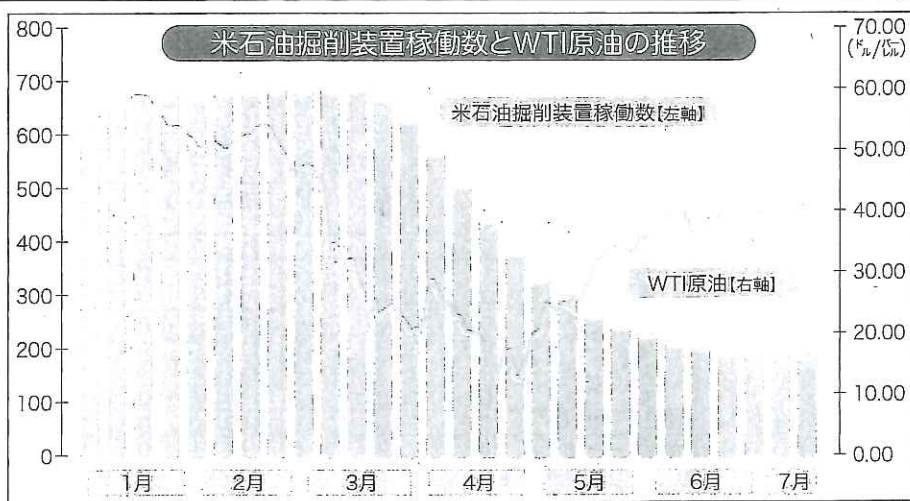
米国の石油掘削装置の稼働が低迷している。新規開発投資の判断材料となる原油価格は回復しているものの、石油開発企業は価格の見通しを慎重に見極めているとみられる。ただ足元のWTI原油は操業コストをまかなえるが40ドル程度で安定した推移をみせており、稼働数が増加に向かう環境は生じつつある。一方で石油生産が活発化すれば、原油相場には下方圧力が加わる（グラフ参照）。

米石油サービス企業（ベーカー・ヒューズのまとめによると、10日の稼働数は181基で、直近で最も多かった3月13日からの減少数は17週で502基に達した。前年同期比では603基減少し、23・1%の水準にまで落ち込んでいる。稼働数低迷にともない、米原油生産量も減

少。EIA（米エネルギー情報局）のまとめで、3月は1300万台で、3月は1300万台が足元では1100万台を付けている。

石油開発業界の関係者は、米国の石油掘削装置の大半がシエールオイル関係者だ。生産期間の短さも稼働数の急減を促した一因とみられる。シエールオイルの井戸は「半年から1年で生産量が半減する」（開発業界関係者）ため、新たな開発投資が滞れば、全体の稼働数は比較的速いペースで減少することになる。

さらに新規開発投資の鈍さにつながっているのが、原油価格の見通しに対するシエールオイル開発企業の慎重な姿勢だ。原油相場は



4月下旬以降、順調に持ち直しているものの、稼働数はいぜん落ち込んだまま。開発業者は「中小事

業者が多く、資金繰りが厳しい。原油価格の底が定まらないと、余裕のないところは投資ができない」とする。ただWTI原油は15日に41ドルと3月上旬以来およそ4カ月ぶりの高値水準をつけるなど、7月に入って40ドルを固めており、新規開発に踏み切る条件は整いつつある。開発業界関係者は「安定して40ドルを超えれば、新規の投資が出てくるだろう」との見方を示す。足元では新型コロナウイルスの世界的な感染拡大を受けて、石油需要の先行きに対する懸念が高まっている。稼働数が増加傾向に転じれば石油需給の緩みにつながる可能性もあり、米国のシエールオイル開発をめぐる動きが注目される。



# ウメモト インフオメーション



2020年7月17日 担当者: 梶野

## 販売実績は1.9%増の770億円

### 5月期の書籍・雑誌販売概況

#### 出版科学研究所

公益社団法人全国出版協会・出版科学研究所が発表した販売概況によると、2020年5月期の書籍雑誌推定販売金額(本体価格は前年同月に比べ1.9%増の770億1300万円)だった。内訳は書籍が423億8300万円、前年同月比9.1%増。前月は同比が21.0%減と大幅減だったが、5月は返品が激減して一転してプラスになった。

緊急事態宣言が解除されるまで休業書店が多かったことや、学校休校の影響でテキストなど学校採用品の返品が行われていないことが要因とみられ、販売状況が大きく改善したわけではないと評する。

雑誌は346億3千万円(同5.7%減)で、内訳は月刊誌が286億8600円(同1.5%減)、週刊誌が59億4300万円(同22.0%減)。

発売延期や中止が多かったことで定期誌の発行が約2割落ち込んだが、コミックスが大幅に増加したため減少幅は抑えられた。

5月13日に『鬼滅の刃』(集英社、吾峠呼世晴)の第20巻が特装版を含めて初版280万部で刊行され、爆発的に売れたことが雑誌全体を底上げした。

返品率は書籍が前年に比べ9.7%減、雑誌は3.0%減、返品状況もまた先行きが見えない。

書店店頭の売り上げは、書籍が約2%減。2月期以降学参と児童書の好調が続いている。学参は約10%増で、引き続き小学生向けドリルがよく売れている。

雑誌の売上げは、定期誌が約8%減、ムックが約15%減と落ち込んだが、コミックスが約50%増と好調だった。

コミックスは『鬼滅の刃』が最新刊とともに既刊全巻やファンブックも好調に売りを上げている。最終話を掲載した『週刊少年ジャンプ』が完売するなど、社会現象ともいえる売れ行きになっている。

■書籍新刊5千点割る  
書籍の新刊点数は、前年同月比12.7%減の4919点。5月の新刊点数は12年減少しており、今年には25年ぶりに5千点台を割った。

推定発行部数は16.3%減の1624万冊で、冊で21.3%減。月刊誌は定期誌のみでは約20%減、ムックは約32%減と新型コロナウイルスの影響で発売中止された号が多数あったことだ。コミックスは約35%増。

復刊誌と創刊誌は、統計開始以来初めて0点となった。

有力誌の休刊も相次ぎ、1978年創刊の『カメフラ』(エモーターマガジン社)、1926年創刊の『アサヒカメラ』(朝日新聞出版)、KADOKAWAの『ウォーカー』3誌など、8点が休刊した。

経済新聞

燃料油脂新聞

化学工業日報

2020 年 7 月 20 日

担当者: 岩崎

## パーム油が上昇

マレーシア先物 5ヵ月ぶり水準

揚げ油やマーガリンなどに使うパーム油の国際価格が上昇した。指標となるマレーシア市場のパーム油先物(期近)は16日終値が1ト2605円

(約6万5300円)。

直近安値の5月上旬から3割上昇し、5ヵ月ぶりの高値をつけた。日本時間17日夕時点でも同水準で推移した。

マレーシアパーム油庁によると、1~6月の生産量は約904万トと前年同期比7%少ない。7~9月は増産期に入ると見られる。パーム油の生産量が減少するとの見方が買い材料が、例年よりも生産量は少なくなる可能性がある

大に伴う移動制限で労働者の集まりが悪く、収穫効率が落ちている(製油会社)。

需要は大口の輸入国の中国を始め、堅調に推移。4月まで止まっていたインドのマレーシア産パーム油の輸入も5月に再開した。マレーシアの6月末の在庫は約190万トと前月比6%少ない。